

一般社団法人 日本小児救急医学会理事長
京都第二赤十字病院 副院長・小児科部長
長村敏生

東日本大震災復興へ向けた小児医療支援事業のさらなる継続と発展を願って



2011年3月11日の東日本大震災から6年半が経過し、防波堤の完成により街の姿が新しくなった地域もあれば、今なお帰宅困難区域の指定が解除されずに故郷へ帰ることができない人々もおられ、震災復興の歩みは地域により様々です。

日本小児救急医学会では2012年12月20日の岩手・宮城・福島の3県行政合同による東日本大震災小児医療復興新生事務局の設立、2013年5月2日のホームページ開設を経済的に支援するとともに、本学会災害医療委員会が中心となって小児医療支援（医師派遣）事業の支援調整を継続してきました。この間、多忙な勤務の中を快く診療支援に応需いただいた多くの先生方には改めて感謝申し上げます。

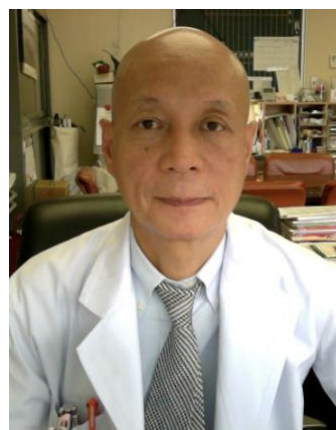
現在も被災地域では、多くの制約の中で新たな小児地域医療モデルを目指す様々な意欲的な試みが模索されています。本学会ではこれからも東日本大震災小児医療復興新生事務局と連携しながら、絆で結ばれた学会員の輪を広げ、被災地域の未来を担う子どもたちのために「ほそくながく」医療支援活動を続けていきたいと考えています。「ほそくながく」の趣旨にご賛同の先生方のご協力を心より祈念します。

2017.9.9

日本小児救急医学会 理事長
北九州市立八幡病院 小児救急センター
市川光太郎

東日本大震災から6年

2011.3.11.から丸6年を経て、明日で7年目に入ります。もしも、ヒトの死で喩えれば、七回忌となります。一つの節目として古代から故人を偲び、身近に呼び、故人との相交わりを求めた儀式は色濃く日本社会に残っています。しかし、直接関与する多くの犠牲者の関係者では当然のことですが、そうでない多くの国民からは遠く過去の事実として、忘却の館に入れられつつあることも事実です。



あの震災で、かけがえのない仲間の小児科医と地域小児医療体制を失ってしまいました。何よりも多くの子ども達を為す術もなく失ってしまいました。一般社団法人日本小児救急医学会と

しても有機的にも無機的にも損失が大きいものと考え、その損失のショックは強く医療支援活動への心を揺り動かされました。直ちに立ち上げた学会災害医療委員会（現齊藤修委員長）のご尽力で、単なる災害支援医療ではなく、これを基に、地域小児医療の支援を「ほそくながく行おう」とのコンセプトで、東北三県の復興新生事務局を岩手県庁内に設立し、活動を続けることができています。

いまでも、多くの先生がたが診療支援にできる範囲で駆けつけて頂いています。世界的被害規模の中で真の復興までは相当な、気の遠くなる時間が必要となることでしょう、その中から、亡くなった子ども達の心を中心としたメッセージを代弁してその内容を紡いでいくことが我々学会員に求められていることだろうと想っています。

「ほそくながく」の支援を現地からもう良いですといわれるまで学会としては続けていく所存です。是非ともその意に賛同して頂き、復興新生事務局を通じて医療支援活動をして頂きたいと願っています。

2017.3.11

丸5年！

東日本大震災と大津波から、丸5年、復興～新生への道程は始まったばかりという程度に過ぎないと完全新生までの道程はきわめて長期のスパンを要するものだろうと推察します。

5年の間に、世界も日本も大きなうねりの中で、色々な変化・変動にさらされている状況で、目を見はる、或いは目を背けたくなる事象に遭遇しています。しかし、3.11.の傷跡は変わらないままであり、まだまだと言うより、もっともっと支援の手が必要な状況と考えています。

小児医療復興新生事務局の設立から丸3年余り、そのあゆみはまさに「ほそくながく」ですが、確実に足跡を残し、足跡の彼方に将来への期待が見通せます。地域小児医療支援につながる医療提供体制が構築されていくことを願うばかりです。

日本小児救急医学会として、救急という急性期のみではなく、まさに回復期の医療支援も救急医療の時間軸の中で、車の両輪と考えて、向かい合わなくてはならないと考えています。心ある会員が一人でも二人でも復興新生事務局を通じて支援の手を差し伸べてくださることを心から願いながら、「ほそくながく」の活動が言葉どおり続いていきますことを願っています。

2016.3.11

ほそくながく

本日 14 時 46 分、3 度目の「黙禱」を院内全職員で行ったが、多くの国民が時と復興の流れの乖離を感じたのではなかろうか。

小児医療支援の急性期学会活動から、その意を「心を紡ぐ」気持ちで継続し、「東日本大震災小児医療復興新生事務局」が被災 3 県の行政の方々の尽力で立ち上がり、支援小児科医公募事業が継続されている。その支援は「ほそくながく」であっても続かねばならないし、新しい地域医療の視点も加味されて地域振興につながる支援へ進化していけば良いと願っています。

地域の子ども達の心を豊かにする支援を行うことができれば、彼らが成人した時の地域の人間性は高まり、助け合いの心は無論のこと、弱者を慈しむ心が溢れる地域になることと期待します。そういう意味では将来を託す子ども達の健康を支援する喜びを多くの小児科医に知って欲しいと願っています。

2014.3.11

東日本大震災小児医療復興新生事務局 HP の立ち上げに際して

平成 24 年晩秋、3 大学医学部小児科教授の御協力もあり、岩手・宮城・福島の 3 県行政合同による「東日本大震災小児医療復興新生事務局」が誕生し、支援医の要望に応えやすい支援施設・診療形態の斡旋が開始された。発災から丸 2 年を経て、より情報公開・収集が簡便な事務局 HP が JSEP の経済的支援に開設され、嬉しい知らせとなった。よりニーズの高い支援医療、その形態、その地区などがリアルタイムで発信可能である。一方、支援をしてくださった先生達の感想・課題や今後の支援医への助言なども貴重且つ参考になる。

平成 24 年 12 月、仙台の名取川河口に行く機会を得た。その光景に立ちすくみ、復興は今からで、粘り強く永く子ども達の支援をすべき！と心底思った。

2013.3.28